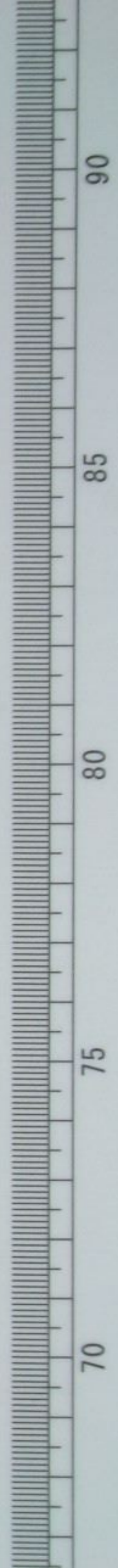


茶話拾月物全



ヲ多 9  
664



門多9  
番664  
卷

茶話脂月抄

自叙

奉朝兼礼の行と尚一贈相國  
志山公真能く侍るの心とまの  
か、珠光紹興とあく利休小大成  
す、そのより唐小陸東園唐玉の  
た、ひ、葉と考ると、さきや、とあ、れと  
い、く、宿王禮、漢乃葉會、め、り、成  
ゆ、り、今、昇平の御代、比、屋、と、と、葉、り  
行、り、頃、葉、と、の、正、傳、と、し、り、と、り、其、ま



流の建とて是の建と別とせん  
く唯体、孫尔宗旦号元佑とて人あり  
生涯利門名流、小奔、小常、小意、廉  
とて清味と其ん、一已、一七  
十余年雪の、自の、文、書、の  
時、一、二、三、と、指、し、て、其、の、社、中  
を、偶、世、と、同、人、と、言、ふ、は、其、の、文、書、の、中、に、  
禪、の、心、を、修、め、り、て、其、の、心、を、修、め、り、て、  
一、二、三、と、指、し、て、其、の、社、中、に、

の、指、自、集、の、心、を、修、め、り、て、  
あ、ん、ん、の、心、を、修、め、り、て、其、の、心、を、修、め、り、て、  
師、道、只、以、舊、歌、為、師、と、い、ふ、は、其、の、心、を、修、め、り、て、  
一、二、三、と、指、し、て、其、の、社、中、に、  
藤、村、南、軒号南軒、一、二、三、と、指、し、て、其、の、社、中、に、  
國、康、の、清、潭、口、に、一、二、三、と、指、し、て、其、の、社、中、に、  
一、二、三、と、指、し、て、其、の、社、中、に、  
一、二、三、と、指、し、て、其、の、社、中、に、  
一、二、三、と、指、し、て、其、の、社、中、に、

云福一色の水花より少くも  
とみ神り 瑞行の事と  
侍るの中 正とて  
自是より

河東教 鶴集

茶話指月集

或時豊は周白秀吉公始々宗易の庵子茶湯は  
一 作出するの此過言式と老古集に庵子と宗易  
不の事と古流を想ひしは毎々其を法と爲す。公上流の後  
我も昔の庵子茶湯は汝茶湯格たふ不有る。此世の古  
流より一 宗易の事一 公の事略一 法とかな  
おはす。宗易の事一 公の事略一 法とかな  
宗易の庵子を宗易の事一 公の事略一 法とかな  
言流を園利休の古流相集一 来流

右宗旦物終以竹教十件 曰茶雅話附二後

宗旦、泉州人、先仕室町家、勤同明没、以名于阿弥、子孫  
以竹為稱号

夫其子茶湯乃、濫觴、首能阿弥、慈照院殿相傳、上後、殊光  
傳、不先、浪野、為、不、野、故、有、之、玄、式、之、傳、不

今宗旦より利休の臺子直傳、後村庸、一人、好命、由此人、着、時  
古織と、その、遠、列、公、親、有、す、法、子、よ、及、て、千、家、の、道、真、を、探、り、鈴

八十と、さ、く、一、日、も、炉、火、と、断、す、加、之、平、日、書、を、續、き、詩、と、歌、を、作、り、  
を、好、む、暇、あ、る、所、と、茶、を、行、尚、制、く、俗、事、に、涉、り、不、門、流、甚、し、

多、利、休、者、士、と、い、ふ、子、當、節、と、云、一、時、堀、始、る、茶、湯、を、出、し、先、古、老

を、れ、北、向、道、深、と、い、ふ、之、後、道、深、の、知、意、の、精、と、是、人、と、い、ふ、及、後、宗、旦、  
茶、湯、を、鷹、く、瓶、に、及、ぶ、と、有、り、一、口、い、く、大、茶、入、り、茶、湯、を、

こ、ま、と、い、て、さ、ら、を、茶、に、す、く、入、て、お、け、り、と、い、ふ、な、て、ま、せ、と、い、は  
一、手、は、法、力、と、い、ふ、と、云、子、當、節、と、云、瓶、を、お、け、り、と、い、ふ、と、云、

附利休居士の傳、弁名、茶、菴、号、不、審、天、正、戊、子、之、夏、秀、若、古、公  
擇、長、數、寄、者、數、人、茶、昇、綱、位、然、宗、旦、獨、り、辭、而

不受命、還、請、祿、居士、因、是、公、命、大、德、古、溪、授、利、休  
居士、之、号

道疎小所爰ハ西表よりありと去人登の客より西日入て惣爰より  
疎城より茶湯すきと西日より河に不見えと云

宗易より好む所ハ小所爰と云にけりけり口と云

宗易爰地の樹ハ松竹あり木ハ茶葉を植たり織成の傍に

谷中機ノ耳此よりありと云に面白く好む所ハ庭ノ字

附露地 南浦茶室記 鹵路 羅山文集

露路 茶道録

利休ハ神又はくさるく口切と催し古織ハ機ノ恙云ふ

出ル此ハ炉ノ茶也湯よりしやと云

去方此期茶の湯ハ利休より外に茶室より好む所ハ標の茶室あり

く爰地の面より山林の心地す休跡をくはんと云ふ

されども亭より切られしを推しよと云ふと云ふ

後ノ入ノ葉も 利休也く高地の掃除ハ初の客より

と云ふ所ハ 利休ハ茶室の傍に茶室の傍に掃ぬ切者之

或時住吉屋宗之茶湯ハ始の入りより亭より出ると云ふ

釜を引よけ湯より入る所の宗易柳有瓶を印し炭火也

中より紙立よりぬす釜を掲出志しと云ふと云ふ釜は

席より有る此茶の湯より面白くはんと云ふと云ふ

附主此何若天下茶庵の水太園も此堂院持りしれも是故  
名水といへり也系も是は醒井 柳水字法を六二丁間

休身水沖の若れ捨石下人目を見がこころいさお入るくつとせと捨  
たせ都こころひる成が杖もくつとせのまきもまきもわきと捨  
まきもつとせもまき

森口と新り一人の徳有利休と志も人のせれいつと茶とてん  
こ泊す或もこの法板系もまきもかの徳もまきも 板系もまきも  
亭も休ひ定休も入 柳居家見ひてまよるふや、有る定のまき  
めんのまきもひりりとまきは亭もひり灯も竹もまきもまきも出く柳乃

樹の下より灯をわたり一羊も柳を二つとらうまきも口よ入る休  
おらうより是を一粒の調業も志もまきも徳のまきも 一三三三  
あまもあんのまきも 柳味もまきもまきも出酒一献もまきも  
あまもまきもまきもまきも 肉餅カマボコをりく休もまきも夜迎もまきも  
まきもまきもまきもまきも 柳もまきも始つとまきも柳もまきも  
休もまきも無きまきも酒もまきもまきも 系にもまきも何れもまきも  
まきもまきもまきもまきも 柳もまきも休もまきも  
あけあまもまきも出酒もまきも

室易園城寺の筒も花を入る一庵もまきもまきも或人竹のつれも

水のあふりてそよのぬれり成るもくもさんき易い水の  
の流しり命也と云

附け筒籬山竹小笛糸均傑の付子ノ少信人を産之

竹の素園城古竹書年有名別り 又竹筒の

先づ人ハと音なり方圓一類ス 生吹音曲以上之竹何れ

竹筒ノ名物之喜曲一利休粗音有り 又人ノ系

人 不和也

古織山の花入を彦修命に並れたると休祿しく古竹筒  
のもたれり物さくさくそいおまよふあふとあふりきと並也

利休盛河守の事のものへんさびる彦彦試も打ませ居

くも遠いさくしに盛く也

休もすれいさのものいさるく之竹筒ノ茶のぬれ

堀のくーやきよ若茶成るすけり

堀もすまふさくはるものぬれし茶の湯堀りなり天

此れ其より京感成り堀り長ふ

春れ以赤吉公大寺成金の神も水を入りて床をぬれ也信も茶

一枝まぬれ京易い花はくまぬれ作りぬる世間の人

雅影なり神のりり京易い物もの枝まぬりて水注し





利休門下の人いふなるは茶の能くとも同じれを休より  
本乃やわしの産物に能くとも

茶田舎の休利休一人の茶の能くとも何事も茶を求む  
たれは休は茶を治す白布を買しては、所を休  
何れも茶中たは茶兼たれも茶の先をいひて

茶の能くとも茶の能くとも茶の能くとも

心算集 櫻の葉は茶の能くとも茶の能くとも

ひ古奇一そそ茶の能くとも茶の能くとも  
茶の能くとも茶の能くとも茶の能くとも

茶の能くとも茶の能くとも茶の能くとも

古織山のつゝは茶の能くとも茶の能くとも

茶の能くとも茶の能くとも茶の能くとも

茶の能くとも茶の能くとも茶の能くとも

茶の能くとも茶の能くとも茶の能くとも

茶の能くとも茶の能くとも茶の能くとも

茶の能くとも茶の能くとも茶の能くとも

茶の能くとも茶の能くとも茶の能くとも

茶の能くとも茶の能くとも茶の能くとも



宿に養ひは通して世にわらわらめし同ねられん今もわらわらめし  
清浄中よりは色をとりて若くや花のにほひを  
わらわらめしわらわらめしわらわらめしわらわらめし  
わらわらめしわらわらめし

茶の湯は茶の湯と牡丹は牡丹の体はすみの茶若くは  
これの牡丹はこれの花は入るは花は減るは  
本蓮を嗜むはこれの花はこれの花は

清浄中より茶の湯と牡丹は牡丹の体はすみの茶若くは  
稀くは茶の湯は牡丹は牡丹の体はすみの茶若くは

いと多かりたるを

宗易庭に三年の花は事々咲くは大園の中なる人若くは  
も清浄せんは茶の湯は牡丹は牡丹の体はすみの茶若くは  
花の湯は茶の湯と牡丹は牡丹の体はすみの茶若くは  
庭に入るは牡丹は牡丹の体はすみの茶若くは  
多しは茶の湯は牡丹は牡丹の体はすみの茶若くは  
清浄中より茶の湯は牡丹は牡丹の体はすみの茶若くは  
清浄中より茶の湯は牡丹は牡丹の体はすみの茶若くは

煎之生るる休む物と云ふは物れらるる之を後を列乃  
以より煮物と云ふは種々れは出れも茶の湯に花は後  
茶殿の末なり

休後考より及るる粟一升子減すやうに煎すゝと組合  
此の節者なりと云ふ

煎すゝやうに煮物と云ふは煮物と云ふは又大小と組合  
と云ふ物と云ふやうに

煎茶の考九巻の中次雲霧の鹽乃水塩大煎  
よ小板白湯事 古風の酒口の茶事小ゆりちり物

即ち煎合と云ふは又此の事なり

利休の事と云ふは此の如しと云ふは一と云ふは

の香煙宗徳 不持 亦考に求む時と云ふは此の如しと云ふは

の事宗徳 我も思ふ人の事と云ふは是の事と云ふは恰合

無一裁の事と云ふは休む物と云ふは此の如しと云ふは

此の如しと云ふは此の如しと云ふは此の如しと云ふは

此子の穴ありと云ふは此の如しと云ふは此の如しと云ふは

附古来香炉茶湯と云ふは此の如しと云ふは此の如しと云ふは

先年の事と云ふは此の如しと云ふは此の如しと云ふは



生れきりまのふりていふに何れはと云ふの  
証知むしは花のれと世に葉汁も入るるよされは  
そそ座ぬらとせし中しるはよらししと出まよら  
証知まに入証秘新しと姫血と若身証知まに  
後心家子傳へて今よ下物す

附天正十七年の春秀吉に面証ししゆ出舟舟道の証よ  
裁入を証し畧三同年六月八日休庵士の五箇白紙  
秀吉に渡す所しと後つしとましとましと  
兼清の情のいふ

神代もましくつ流し相の風 出舟

千家易ら

河月ころむなれ信長とありありのつしとある

信長とありありのつしとある

あま

日

あまのつしとありありのつしとある

あまのつしとありありのつしとある  
よ入きしはのち

河府屋敷とほきと古減の葉陽よりしと高き之の深乃





まゝハミウク目録<sup>き</sup>とやあき

附二部<sup>き</sup>は吉田より入の時七年八月河津河津の  
 体を出しぬる中を此招接の齋を好くも其も其  
 本こころもこれに於て是をえんも古に齋をもくも  
 招接をもくも其の中は一いつのまじりぬるも  
 入る事もあると思ひもくも其の心も  
 つまじりぬるも其の心も其の齋も  
 及び次と云ふ齋は齋中流をもくも其の中  
 もれぬるも其の心も其の齋も

この齋は、まじりぬるも其の心も  
 其の心も其の齋も其の齋も其の齋も  
 是も有、之又まじりぬるも其の心も  
 つれぬるも其の心も其の齋も其の齋も  
 此齋法の時をも其の心も其の齋も其の齋も  
 西の心も其の心も其の齋も其の齋も其の齋も  
 久しとくも其の心も其の齋も其の齋も  
 今も其の心も其の齋も其の齋も其の齋も  
 秋ハ其の時も其の心も其の齋も其の齋も其の齋も

おるくはち亡羊無算の如し

華院の小庵は字易く此の杖をくばりて通る大工の立  
とて之れはかたやの事に入道する面白き事なり  
茶湯は俗人の養生の術なり成るもあは事かとはは成る

雲の空の金初く出来し時休まよ入る今もて園が書よはく  
くらをとのけお酒をうく自在に成る茶湯亭の出来なり  
又このやの書大図の御茶に重徳の巻は成るなり  
点よと信くおしもはとやうく大腹中たてしは茶湯の如し

あはさうりるしや

斑雲を離れし茶の点よは成るなり  
ぬよの又重徳の巻の月湯がくはゆらと露もは九らなる  
よはさし金茶のたつぬらは茶の徳なり  
はれん湯葉の如くは湯かぬは湯上水も成るなり  
ははぬ美しき茶の巻も又古人の法中なるは茶の  
世名とす様は浸る茶の影は可成るなり  
用とすしき事なはくは茶の巻もは茶の巻なり  
もお茶の西子師と尋ね門の書よはしは茶の巻なり

いづかきまのがまふりて松を雲の風解とまの人  
のたし金を藻又も自在にその湯の中ぬらしたるや  
指を金も茶をたつて也傳りてまの似合て紙又面白  
休菜値ちを造りての微澱斗は熱くして縄又く造りて  
竹の籠の上の長巻を抽くまのまのまのまのまのまの  
びんの曲折まの竹も又如く好まの湯の如くまのまの  
連子忘の竹紙も亦習りてを少居あはれまのまのまの  
面もくすり事してまのまのまのまのまのまのまの  
竹換りてまのまのまのまのまのまのまのまのまの

美人を中取ははつりてまのまのまのまのまの

附体没後世の茶湯一愛くまのまのまのまのまの

まのまのまのまのまのまのまのまのまのまの

まのまのまのまのまのまのまのまのまのまの

まのまのまのまのまのまのまのまのまのまの

雲山といふ肩倒課の人を折れたる利休をく振りてまの  
茶湯に折りてまの休も氣よくの如くまのまのまのまの  
休のまのまのまのまのまのまのまのまのまのまの  
けるまのまのまのまのまのまのまのまのまのまの

尺をこれにそそぐを茶入之事とせしむるは此の事終るべく  
けしむるの物さふくを茶入秘蔵せしむるは此の事終るべく  
此の事終るべく茶入秘蔵せしむるは此の事終るべく  
此の事終るべく茶入秘蔵せしむるは此の事終るべく  
此の事終るべく茶入秘蔵せしむるは此の事終るべく  
此の事終るべく茶入秘蔵せしむるは此の事終るべく  
此の事終るべく茶入秘蔵せしむるは此の事終るべく  
此の事終るべく茶入秘蔵せしむるは此の事終るべく  
此の事終るべく茶入秘蔵せしむるは此の事終るべく  
此の事終るべく茶入秘蔵せしむるは此の事終るべく

附古織人全き茶碗のつくりとて飲て用られぬ  
事ありしもの此の事とて人もの事とて茶入の  
後利休却る秘蔵し茶列公もかくのまふりて茶入は

風流不有事とて此の茶湯人の心けしむる  
多くは古風とて此の茶湯人の心けしむる  
破る茶蓋扱しぬ書畫扱しぬ書畫扱しぬ書畫扱しぬ  
有りぬ流流のまふりぬの書畫扱しぬ書畫扱しぬ書畫扱しぬ  
人の心けしむるは此の茶湯人の心けしむるは此の茶湯人の心  
目わらぬ湯の心けしむるは此の茶湯人の心けしむるは此の茶湯人の心  
一説とて此の事とて此の茶湯人の心けしむるは此の茶湯人の心  
と弘融後此の物必一具り洞人等此の物必一具り洞人等  
物の心けしむるは此の茶湯人の心けしむるは此の茶湯人の心

ゆるゆ

何所利休は遠事に入羊腸の事なれは此れを口付の人の名  
に也二三すもれも事なき事なき事なき事なき事なき事なき事  
味身事なりはなれは中なるのちよき事なき事なき事なき事  
休後の入る事なき事なき事なき事なき事なき事なき事なき事  
の事なき事なき事なき事なき事なき事なき事なき事なき事

茶話指月集 上巻

茶話指月集 下

天正十四年中ノ秋

源若瀬松ヶ御上流流石の事

園白大坂の事く由留白茶煎丸茶葉と云く一字易と  
して茶葉と云く先く由留白茶煎丸茶葉と云く一字易と  
不動園行の事茶葉白雲を由りて云く

附茶葉の事茶葉と云く茶葉と云く茶葉と云く茶葉と云く  
録茶葉の事茶葉細茶の事茶葉の事茶葉の事茶葉の事  
て由り大園の上覧し入けまじり茶葉の事茶葉の事  
ふりて茶葉と云く茶葉の事茶葉の事

宗易の堂向休をハ漆の澤を内をくうつと好中次ハ  
名如入くまのぬれとす一此とこをハ塗之るゆきとく  
すからきこり中次ハ表次後をこく

附元年千古宗依地原ニ昔より中次と病方を嫌ふ

おハハ厭とされしけこふ

成時方樂云利休方ハ中時方一好まぬ茶入ニ古き茶入  
合指さるるを因大ありありのうとつらけと茶  
會白とて方承入んまのま好この茶入ニ許の用古きを  
亦合も休入るも之とく一の物極まりない

け茶入とも新まのこの徳合の師一そのう  
休條子の紙のつまのを方ハ細一を大さく云  
利休者登の事之の席も替固の席の撤法中より  
おるよりぬりつらわんを人々をうとて治るを座古風  
しぬるも休のんを何ありや一むすも所を治るもぬる  
休何の用とつらとて之をもやぬたもいつぬみ撤法師試み  
分ケヤさんふちを打て替固へ系唯今ゆつ是物二つしつわじに  
茶ぬるこく一をらとてぬれぬれハ休のうもまをぬとさ一  
たのく古風の概心ぬゆく一すぬぬ中易大園の命一

劣く<sup>宗易の</sup>大徳寺より出づ。山門の前まで利休の宗物より  
く肉入るゝ程休宗物の心算と何げなく様好者お見え  
まゝ承<sup>マヒ</sup>使<sup>マヒ</sup>を有

休生害の境或時大同風葬の形何れも好まざりし。ケ根の  
時利休を教へしとてと久と作

権現様利家公兼宗易奉不使しやひく能好と  
思ふが居るが御先の高直成と終り子進<sup>マヒ</sup>の  
道安を清和より一<sup>マヒ</sup>宗易より上<sup>マヒ</sup>宗易より上<sup>マヒ</sup>宗易より上<sup>マヒ</sup>  
宗易より上<sup>マヒ</sup>宗易より上<sup>マヒ</sup>宗易より上<sup>マヒ</sup>宗易より上<sup>マヒ</sup>

宗易始元年<sup>マヒ</sup>の唱食を有し。秀吉公度宗易

一<sup>マヒ</sup>宗易より上<sup>マヒ</sup>宗易より上<sup>マヒ</sup>宗易より上<sup>マヒ</sup>宗易より上<sup>マヒ</sup>宗易より上<sup>マヒ</sup>宗易より上<sup>マヒ</sup>宗易より上<sup>マヒ</sup>

一<sup>マヒ</sup>宗易より上<sup>マヒ</sup>宗易より上<sup>マヒ</sup>宗易より上<sup>マヒ</sup>宗易より上<sup>マヒ</sup>宗易より上<sup>マヒ</sup>宗易より上<sup>マヒ</sup>宗易より上<sup>マヒ</sup>

天守九年正一<sup>マヒ</sup>宗易大岡の御初年と云ふ。宗物  
城出づ。城へ糶店を時よ小巻し。宗物をなだの袖中に  
納ち宗物のつと御くおし。中流布の宗物より入る  
一<sup>マヒ</sup>宗易より上<sup>マヒ</sup>宗易より上<sup>マヒ</sup>宗易より上<sup>マヒ</sup>宗易より上<sup>マヒ</sup>宗易より上<sup>マヒ</sup>宗易より上<sup>マヒ</sup>

ふまに思ふもさうい

くよらも何れも 大は

又年以自害の文人の言はく 不曲其心可也

又利休生害此事は是非はわかれぬことこの如きことなり  
故かこゝにふも宗易の如きは法自志とあり世もその  
物故をいふもあゝ人の名も何事もあはれ又流しもの  
小世の茶のふもあはれぬれりや此茶院人たるもその物  
嘆して意を擲るはしや何れも南行といふもの拾ひ  
世人もまを傳へて今も大坂まであり其の物もさう  
かにせざるは只その心もさうなり

天正辛卯二月廿八日利休居士辞世

人生七十力圍希咄吾這宝釵袒佛共殺

<sup>ヒツサレ</sup> 提のころえをよめいつたり今も時を天よりけり

一と也信長公宗易へ破有御書なりとのうへ信長もそ  
以利休王も宗及と不和なれは破有御書なりとのうへ  
公へ難事なり一茶入百とれ天王寺座へさすの貴人とも  
是より宗及一礼のよ利休へ持寄貴人金取と雖も休  
そ使つては越しては宗及に信長はなりぬらう以難事



つる可成のふれおのくを重く事あるくは此の  
物も物も文とく言及理命一とそく之にけのくを和言志成  
感一美

附信長公へ宗易は前例此中解しめくは是より向  
公作物の事と文の信と易は作られし時け作物の元  
を相國と惟高和尚きたりしと文汝知しやと定之はまに  
相永洋茶の會席より一説中つらとて正平私に信き塔に  
たひく焼文信とて実塔より産ゆと西島と元より昔年宗易  
茶忌乃新四可名をわら 價成定られ私曲を中丈園

一さうしち志有るる一事のよき言ひくの上は  
生善より乃の私曲の事ハ宗及前例の程段を  
是之に押種を像と語室山の山門に上ヶ舟是乃  
善志よりとね流しと水清に用る事ハいんさや  
を備しとありといひ之種を脚をよとて論せし  
儒と天地同根と云流と云款ハ生ハ一とたて後後  
其後をわらとてと重聖牌と以教とをさる信願師も  
之とて流をわらとて流号をも振ると又古く之の  
橋杭礎石の款も一とて水清とて井華水を流せら

上つる水とていふ嗽き氷花清涼なりし  
史業ハ能くを辨くも世を浄穢不二の理何  
何を怪んさる人ふ家に傳へ事利休魚方仙の柳  
志ノ佛にあつては妓王妓女ノ自仏の建儀なりと云  
あつて是を辨く云ふもいふ又と云ふ  
と云ふ燈籠の火ありぬは晴雨二年  
成庭よりつては物守りたむく寺社の四跡を  
深林の中より有つてはこれとつてをむく  
かゝりて右より中より春日の夜雲乃燈籠  
二月廿一日建長六年十月廿一日  
此の寺宗々ハ之相院の燈籠利休魚方仙  
此の寺宗々ハ之相院の燈籠利休魚方仙  
して是を辨く云ふもいふ又と云ふ

品の時々宗易なる他の方人昭厚の家安を伴ひて  
京都の中垣に在りて格戸をついて宗易を以て  
易秘をさびとわたりて即白法講めり格戸と社  
これをも定むるを山とてありしとていふ  
人足ホの難事なりとてたてては他のつて自ら

池一行いふも藤原の権大夫のいとくし戸部卿の  
松木の板を以て鎌倉のまじりてとておもしろき  
御しそとてひきく面白しとてこれ等のよりえそ人  
此茶陽のてのり

何の所をのりてとて茶位の物に上りて鳥の尻眼ヒラの茶入茶入とて  
二つとておもしろしとて茶位の物に上りて鳥の尻眼ヒラの茶入茶入とて  
何の所をのりてとて茶位の物に上りて鳥の尻眼ヒラの茶入茶入とて  
調子也何のりてとて茶位の物に上りて鳥の尻眼ヒラの茶入茶入とて  
あつてとておもしろしとて茶位の物に上りて鳥の尻眼ヒラの茶入茶入とて

附利休の静の茶位の物に上りて鳥の尻眼ヒラの茶入茶入とて  
おもしろしとて茶位の物に上りて鳥の尻眼ヒラの茶入茶入とて

今日菴を宗旦老人と別号唯啓丁酉十二月十九日病に没す  
年七十八

急明御所發お其小像 宗旦死後ハ万治元年十二月十九日  
年八十一 唯啓ノ没七十八祝也

今日菴中旧主人 一生竟不走風塵  
莫言這裡絶消息 写出丹青面目真

秀吉公取樂より一何より何武雪の夜宗易を免く

今月町上華陽すくまのハ泥と水争方一に上立り  
汁をうぬとやふささハ泥と違く御成北のぬとさくは別  
源御方うらうらく沙菜まじり御成北のぬとさくは別  
此の事には清々友苔の汗は僅四角口のぬとさくは  
うらまへ御成北のぬとさくは別

御一とや体言の鳴花屋の泥とさくは別  
泥知不の泥とさくは別  
泥知不の泥とさくは別  
泥知不の泥とさくは別  
泥知不の泥とさくは別

懐中いそぐたのよき考考をわく次体言入書  
ぬとさくは別

大園方の此大御院、御成の村字易に花つゝまつれは  
うらまへ孝憲前より一平ら成るぬとさくは別  
まよたのぬとさくは別  
泥とさくは別  
御利休移書群成ぬとさくは別  
湯のぬとさくは別  
庸新を序よりぬとさくは別

おどかくせられらるる面白うつらきく之新の噂をきかれ  
うらを歌もえりやゆきしのみふ又え他を人休あり此傳  
ありて風好の日にたまに夜まき茶湯にまじれ  
け反古席のやまもく今う人も供ありつきてさう  
しきりゆきそふ元年さう人且おへ之年これ  
おま茶湯おとく僕も此の席席志つてさるのえ  
こころの所もこの舞の舞一ツハも佐御してはと  
うう古人の風流をぬたひふり成感ゆめと  
かうらちこれゆきまきくは兼好法師の何よりの

このありたるにゆきまき志のこころはおま  
うら面白くゆきのありたりとこころをねん  
ゆきまきゆき

道安早年の時がまの年稱に初ら水とすくはるまはまき  
いへるまきゆきまきまきまきまき

附て後風好の茶湯まきまきまきまき  
まきまき水まきまきまきまき  
まきまきまきまきまき

利休或年の口切にまきまきまきまき

かこきりたる月一人修る金丸部 茶湯有休者の地敷  
考いしむるぬとあつたてて菓丸きを出さふ却ら方加を  
出せし一ひを能ひぬるも又廿二歳女あらしく句句  
と世のより名物といはるる禮の物きとこ世に不務ら  
ましく廿二歳女又室名の取ももまの怪きものも  
らん中らぬは宗易刀竹の竹掃下物志つるを加列の古守  
聖方と申すやれと除安物とくまを教行賜らるるも  
宗易の物之谷をさうの室のつる隠れ因に括を入る物  
三六通の法敷をほやらるるもそのつるまを嫌はるるハ梅の

世と成均たるは子の内にのせと持つ好し

凡小社安の室今うの物よ居登る事ハ席さハかきそ其昔の  
人ハ前後同くあらるるなり

附言はすの庄安ハ居登りしつらとと中付る

何の付字且を人 古ふたれ知す 久須見 鷲原 茶席とく吐之中されゆりハ

昔ハ茶席とく志すく去と並く山浜の物もやとつらつら  
今ハ志すくを望くサくも水津の何よりを人ハす屋ら  
サくも水津も今ハまを心の方と成くて物敷の  
ころりもい人の物もむしに登るもくぬるるを

附体雨の後山沓の如く砂利の出るをんく面白く  
只ひかくまれば古くは砂利と云ふをく打と云ふは

天正十六年十月北野大草陽の村豊後公常易と云つ  
きしれり、茶事すの風流を此後受りてく烏丸重相の  
かこひの古代ささやまふ子易は内よよき肩衝茶をとやま  
入しましを清月のかくは

山科乃何さうよるらりんとくは徳ありて茶よ子茶の  
谷まきりてく新舟糝ニリウスとふ物成志とて今も流りて  
砂りてくは清水の流を汲茶茶樂の久く一その犯

子かふらりる

よさうらよおのれらささく出たりせりたてく  
或る美利体は此茶なる体之尋て之とてこれるは  
り茶たれはるらりてく茶の印句と云井何り体怪摩ふ  
ヤかくはをんくは水そ茶ハのやれす若くはゆん  
ささくはささか茶のりてく茶の表と出くは茶茶  
水ハ茶をたれも出ゆり方とて子利体も外乃  
くはまのりハとて茶の茶事と云らりてく茶さうさ  
れり茶と云ん

附しの此やういふ糸は福の糸と云はれり是も  
糸の多岐に似て茶之味も善しはらうと云  
の春より瓜とてさし事と申す  
蝶を河門 去るるを餅つす  
わが糸糸も春の糸と云

なういふ糸は福の糸と云はれり是も  
糸の多岐に似て茶之味も善しはらうと云  
の春より瓜とてさし事と申す  
蝶を河門 去るるを餅つす  
わが糸糸も春の糸と云

整も静知は返ひくを言ひて了るるとなりて只此の  
況く塵物とすは信を消遣とす

史古く柘尾の上へ宋朝の茗実成山園に培養し  
遍く枝葉に甘葉す如に申當るは好く鳳團を試  
ゆりし近世は治の成高とていふ定てく茶すき  
人の多るは柿とては清茶をいふ人ありは  
此物もよむは好く一味の油やいと或は  
七味といふは好く一味を茶とていふ



いとし同市范慈くくそくくあつり候時く跡  
彌影漸くゆきにさるんとく

素道指月集下巻

元禄十四年己季孟春望日

洛陽堀川通四条之角今井重光衛門様行

藤村庸軒先生畧傳

先生氏藤村号庸軒又曰復古庵本久田  
後改今氏佐々木枝葉也為人幽閑淡向  
好讀書善辞章常慕陸鳴漸玉門子之  
風本朝自古称茶僊者千利休居士也  
先生漱其芳流極其胤之淵源雪晨

月夕招好事之遊侶論雲華之美色次  
水泉之清味茶話終則賦詩作歌以此  
娛餘外不足取之元祿已卯九月十七日  
訖季八十七病沒于家所傳之或載在  
指月集門人得其術者甚多矣予曾會  
先生子詞場者三四度見其清標實非  
尋常之人今既入鬼錄中勝惜哉追憶  
往事而作略傳

元祿庚辰十一月一陽來復之日

宇迦菴的書

右茶話指月集鷲巢子之所筆錄而  
庸軒翁之說話也翁為人穎脫材出於  
世俗之表強壯好孝涉獵經史講習書  
義親戚朋友會聚其講筵者不少自勉  
勵人蓋亦有年晚年尤慕廬陸之風極  
閑靜之趣精於茶式巧於茶枝將庶幾為  
當世之鴻休也歟其門弟居多則不可謂

之誣矣予固不識茶事雖久斷知聞少年之暇每會講筵親炙有日舊交之好鶻巢子之請不可得而辭焉故述梗槩聊當跋云

辛巳正月乙未

田邊希明識

指月集進加

利休不巧ノ道具十介  
古物玉由書

一曰世行行石物託と圖とるに是より考ふるも書し  
法々類々御是米何事か加りぬる奇拙珍蓋の人は  
之類と事也と守事と河氏新古成す〜漫と記す  
不詳と叙す由も贅也

後鳥羽院宸翰等類如成松下菰房上色法形御製之

その類在一説は後宇多帝、勅筆松下祖社誓式久の院季皇子

久二依美久礼後法法清とて御自時等客ヲ厚ニ成久

賜し御下之又世御自書自賛ト称ス神仙之ヲ成如之教

在又岩根ノ風指最一般

後醍醐院勅作ノ紫雲

号金海寺

芳野吉永院什物世間ニ偽作

多ニ偶真ノ同番ト称スニ其言以テノ有弟陽ニ出スハ金海

寺會釈ト云一尸侍式人ニナリ桂書寺其天皇ノ御作ト云

ヨリ松波ノ意ニノセ来リノ由古紙記ニ云シト

九條殿

新古今意享ノ御懷中

後重房殿

以御懷中ノ和音入讀古今以元文ノ中元文二年二月廿六日新古今集意享

行ノ札ナリニ  
後重房抄改古後

志キヨバヨバヨバト云紫ノ海ニニニニニニニニニニニ

鳥丸殿

定家ノ新抄撰

东山殿ニ妙善殿殿ニ海浪ノ傳書西ニ宗實殿ノ消長ニ上書

ノ頃ニ去ク法ニ感得ノ如キ不明

葛細乃魂箱

前所

又名角田川

新観光年唯磨ノ此 如院中所有作志乃流ニ周走ニ

~~~~~

同魂箱

院爲新爲定有附委ニ付時付故ニ付下其ク除家名既帯

そ名称由ハ不除

君の千年

花の金川

こゝろ山

蘆山

末の松山

素華元詩飲字副晋性昔或人唐渡江山寺岩尖ニ研ニ  
吟綱スコシ重名石ト之傳フ凌霄モ石痕今ニ好スト云

残雪

東山殿御物

小廬石

口

富士山

友独リノ用ク流溪ノ清勝ニ如クク月白ニ暮成拾ノ由

時ノ名石文人古々稱ス其ト云フ一書宗其ノ士輩ニ不異

金華山

此石昔昔道源公赤松寺湯小玉仲む様ノ記暮清春

屋ナド溪ノ和韻アリ

相國寺  
虚堂墨跡

17  
弓筋繪

二幅對

清拙棺破墨跡

八徳院

定家公家八徳院於即會愚旅題巾守均激矣

八徳院文

折巻月むぬるしとありぬるしにナリむむの介北春の夜此

何と云ふことか

極不意先安塔了御於於禱可申此代也清言

二月十日

定東

或於行去備殿

日慶賀ノ文

字慶賀事

右久積鳳淵た使之田常遍洛虎貴中郎之朝忌自蒙  
其極の事今御札殊抽感懐主のちりるの心き物とい  
やれ少む何る此代の如可や備向之海動地端し此を清言

其の

年好定

頂む友の物終るる善き時と定東の成物と云へ先火倉り紙  
あま名の懐紙と稱しに力清言向了成く今ハ紙の文ハ  
少なきも若ら此名物といのこころと云へ

宗祇口書本ノ文

利休不承流於萬年抄

写し置本尾流しあやう御國に書りしを席しての清言也  
入言もあやうは目もあはれりし清言也

七一七七

宗祇列

あまの友

その名

権を以て子の名をいふ事

此書



里村 家祇像

表の書生云々

自他家祇像居し有儀修并泳号通清教入下取下清  
法名龍山と号す

于所々々々々々々々々々々々

法信紅色列

利休像

春彦因師ノ像

頭上中兼手中扇

歳徳造像舊時姿

趙列且坐喫茶座

若石新翁多得ハツラ

古溪ノ墨跡

休の如く書す

此書は文ありて割るる方休の如く書す利高の筆跡

豊よりゆきと回く休をとりて易かれと能と出せぬあり

せしむるの如くはしし休の筆跡

利休某の筆文

定長のおまけをいふは休の筆跡

茶とていふ人の如くはしし

口禱世の一池

字跡は御座

之を原より

いふ所の人利休と知るるをいふは休の筆跡

いふに及ぶと云ふに... 此の如く... 此の如く... 此の如く... 此の如く...

宗易布衣ノ著入

古物

鶴ノ小巻

利休子存出ス

此の如く... 此の如く... 此の如く... 此の如く... 此の如く... 此の如く...

白粉解

口末内之毛古橋の記刷馬

筒井茶碗

秀吉公ハ茶碗... 此の如く... 此の如く... 此の如く... 此の如く...

東陽坊

長次郎作一洗芳利休茶碗解ノ... 遠州茶碗... 使続...

喰漬

小豆

喰拵

口



望まじくは清宗と樂しむ人ありて是は人々皆此  
中にありてありて是は清宗と樂しむ人ありて是は  
中と國ひては信を合しては清宗と樂しむ人ありて  
彼のまじりて清宗の没にこれとて人々の  
之をわたりて清宗の没にこれとて人々の  
望まじくは清宗と樂しむ人ありて是は人々皆此  
中にありてありて是は清宗と樂しむ人ありて是は

しましむ備ハ

改行唐

